

第 20 章

ハリーはこれほど奇妙な一団に加わったことはなかった。

クルックシャンクスが先頭に立って階段を下り、そのあとをルーピン、ペティグリュー、ロンが、まるでムカデ競走のように繋がって下りた。

シリウスがスネイプの杖を使ってスネイプ先生を宙吊りにし、不気味に宙を漂うスネイプ先生の爪先が、階段を一段下くるときに階段にぶつかった。

ハリーとハーマイオニーがしんがりだった。

トンネルを戻るのが一苦労だった。

ルーピン、ペティグリュー、ロンの組は横向きになって歩かざるをえなかった。

ルーピンはペティグリューに杖を突きつけたままだ。

ハリーからは三人が一行になって歩きにくそうにトンネルを横這いしていくのが見えた。

先頭は相変わらずクルックシャンクスだ。

ハリーはシリウスのすぐ後ろを歩いた。スネイプがシリウスに宙吊りにされたまま、三人の前を漂っていたが、ガクリと垂れた頭が低い天井にぶつかってばかりいた。

ハリーは、シリウスがわざとよ避けないようにしているような気がした。

「これがどういうことなのか、わかるかい？」

トンネルをノロノロと進みながら、出し抜けるにシリウスがハリーに話しかけた。

「ペティグリューを引き渡すということが」

「あなたが自由の身になる」

「そうだ……」シリウスが続けた。

「しかし、それだけではない。誰かに聞いたかも知らないが——わたしは君の名付親でもあるんだよ」

Chapter 20

The Dementor's Kiss

Harry had never been part of a stranger group. Crookshanks led the way down the stairs; Lupin, Pettigrew, and Ron went next, looking like entrants in a six-legged race. Next came Professor Snape, drifting creepily along, his toes hitting each stair as they descended, held up by his own wand, which was being pointed at him by Sirius. Harry and Hermione brought up the rear.

Getting back into the tunnel was difficult. Lupin, Pettigrew, and Ron had to turn sideways to manage it; Lupin still had Pettigrew covered with his wand. Harry could see them edging awkwardly along the tunnel in single file. Crookshanks was still in the lead. Harry went right after Black, who was still making Snape drift along ahead of them; he kept bumping his lolling head on the low ceiling. Harry had the impression Black was making no effort to prevent this.

“You know what this means?” Black said abruptly to Harry as they made their slow progress along the tunnel. “Turning Pettigrew in?”

“You’re free,” said Harry.

“Yes ... ,” said Black. “But I’m also — I don’t know if anyone ever told you — I’m your

「ええ、知っています」

「つまり……君の両親が、わたしを君の後見人に決めたのだ」

シリウスの声が緊張した。

「もし自分たちの身に何かあればと……」

ハリーはつぎの言葉を待った。シリウスの言おうとしていることが、自分の考えていることと同じだったら？

「もちろん、君がおじさんやおばさんとのまま一緒に暮らしたいというなら、その気持はよくわかるつもりだ。しかし……まあ……考えてくれないか。わたしの汚名が晴れたら……もし君が……別の家族がほしいと思うなら……」シリウスが言った。

ハリーの胸の奥で、何かが爆発した。

「えっ……あなたと暮らすの？」思わずハリーは、天井から突き出している岩にいやというほど頭をぶっつけた。

「ダーズリー一家と別れるの？」

「むろん、君はそんなことは望まないだろうと思ったが」シリウスが慌てて言った。

「よくわかるよ。ただ、もしかしたらわたしと、と思ってね……」

「とんでもない！」ハリーの声は、シリウスに負けず劣らずかすれていた。

「もちろん、ダーズリーのところなんか出たいです！ 住む家はありますか？ 僕、いつ引っ越せますか？」

シリウスがくると振り返ってハリーを見た。

スネイプの頭が天井をゴリゴリ擦っていたが、シリウスは気にもとめない様子だ。

「そうしたいのかい？ 本気で？」

「ええ、本気です！」ハリーが即座に答えた。

シリウスのげっそりした顔が、急に笑顔になった。ハリーが初めて見る、シリウスのほんとうの笑顔だった。その笑顔がもたらした変化は驚異的だった。

骸骨のようなお面の後ろに十歳若返った顔

godfather.”

“Yeah, I knew that,” said Harry.

“Well ... your parents appointed me your guardian,” said Black stiffly. “If anything happened to them ...”

Harry waited. Did Black mean what he thought he meant?

“I’ll understand, of course, if you want to stay with your aunt and uncle,” said Black. “But ... well ... think about it. Once my name’s cleared ... if you wanted a ... a different home ...”

Some sort of explosion took place in the pit of Harry’s stomach.

“What — live with you?” he said, accidentally cracking his head on a bit of rock protruding from the ceiling. “Leave the Dursleys?”

“Of course, I thought you wouldn’t want to,” said Black quickly. “I understand, I just thought I’d —”

“Are you insane?” said Harry, his voice easily as croaky as Black’s. “Of course I want to leave the Dursleys! Have you got a house? When can I move in?”

Black turned right around to look at him; Snape’s head was scraping the ceiling but Black didn’t seem to care.

“You want to?” he said. “You mean it?”

が輝いて見えるようだった。

ほんの一瞬、シリウスはハリーの両親の結婚式で快活に笑っていたあの人だとわかる顔になった。

トンネルの出口に着くまで、二人はもう何も話さなかった。

クルックシャンクスが最初に飛び出した。木の幹のあのコブを押してくれたらしい。

ルーピン、ペティグリュー、ロンの一組が這い上がっていったが、梓猛な枝の音は聞こえてこなかった。

シリウスはまずスネイプを穴の外に送り出し、それから一步下がって、ハリーとハーマイオニーを先に通した。ついに全員が外に出た。

校庭はすでに真っ暗だった。

明りといえば、遠くに見える城の窓からもれる灯だけだ。

無言で、全員が歩き出した。

ペティグリューは相変わらずゼイゼイと息をし、時折ヒーヒー泣いていた。

ハリーは胸がいっぱいだった。

ダーズリー家を離れるんだ。

父さん、母さんの親友だったシリウス・ブラックと一緒に暮らすんだ……ハリーはボーッとした……ダーズリー一家に、テレビに出ていたあの囚人と一緒に暮らすと言ったら、どうなるかな！

「ちょっとでも変なまねをしてみろ、ピーター」前の方で、ルーピンが脅すように言った。

ペティグリューの胸に、ルーピンの杖が横から突きつけられていた。

みんな無言でひたすら校庭を歩いた。

窓の灯が徐々に大きくなってきた。スネイプは顎をガクガクと胸にぶっつけながら相変わらず不気味に宙を漂い、シリウスの前を移動していた。

すると、そのとき――。

雲が切れた。突然校庭にぼんやりとした影

“Yeah, I mean it!” said Harry.

Black’s gaunt face broke into the first true smile Harry had seen upon it. The difference it made was startling, as though a person ten years younger were shining through the starved mask; for a moment, he was recognizable as the man who had laughed at Harry’s parents’ wedding.

They did not speak again until they had reached the end of the tunnel. Crookshanks darted up first; he had evidently pressed his paw to the knot on the trunk, because Lupin, Pettigrew, and Ron clambered upward without any sound of savaging branches.

Black saw Snape up through the hole, then stood back for Harry and Hermione to pass. At last, all of them were out.

The grounds were very dark now; the only light came from the distant windows of the castle. Without a word, they set off. Pettigrew was still wheezing and occasionally whimpering. Harry’s mind was buzzing. He was going to leave the Dursleys. He was going to live with Sirius Black, his parents’ best friend. ... He felt dazed. ... What would happen when he told the Dursleys he was going to live with the convict they’d seen on television... !

“One wrong move, Peter,” said Lupin threateningly ahead. His wand was still pointed sideways at Pettigrew’s chest.

Silently they tramped through the grounds, the castle lights growing slowly larger. Snape

が落ちた。一行は月明りを浴びていた。
スネイプが、ふいに立ち止まったルーピン、ペティグリュー、ロンの一団にぶつかった。

シリウスが立ちすくんだ。

シリウスは片手をサッと上げてハリーとハーマイオニーを制止した。

ハリーはルーピンの黒い影のような姿を見た。

その姿は硬直していた。

そして、手足が震え出した。

「どうでしょう——あの薬を今夜飲んでないわ！ 危険よ！」ハーマイオニーが絶句した。

「逃げろ」シリウスが低い声で言った。

「逃げろ！ 早く！」

しかし、ハリーは逃げなかった。

ロンがペティグリューとルーピンに繋がれたままだ。

ハリーは前に飛び出した。

が、シリウスが両腕をハリーの胸に回してグイと引き戻した。

「わたしに任せて——逃げるんだ！」

恐ろしいうなり声がした。ルーピンの頭が長く伸びた。体も伸びた。背中が盛り上がった。顔といわず手といわず、見る見る毛が生え出した。手は丸まって鉤爪が生えた。

クルックシャンクスの毛が再び逆立ち、タジタジとあとずさりしていた——。

狼人間が後ろ足で立ち上がり、バキバキと牙を打ち鳴らしたとき、シリウスの姿もハリーのそばから消えていた。変身したのだ。

巨大な、熊のような犬が躍り出た。狼人間が自分を縛っていた手錠を捻じ切ったとき、犬が狼人間の首に食らいついて後ろに引き戻し、ロンやペティグリューから遠ざけた。

二匹は、牙と牙とががっちりと噛み合い、

was still drifting weirdly ahead of Black, his chin bumping on his chest. And then —

A cloud shifted. There were suddenly dim shadows on the ground. Their party was bathed in moonlight.

Snape collided with Lupin, Pettigrew, and Ron, who had stopped abruptly. Black froze. He flung out one arm to make Harry and Hermione stop.

Harry could see Lupin's silhouette. He had gone rigid. Then his limbs began to shake.

“Oh, my —” Hermione gasped. “He didn't take his potion tonight! He's not safe!”

“Run,” Black whispered. “Run. Now.”

But Harry couldn't run. Ron was chained to Pettigrew and Lupin. He leapt forward but Black caught him around the chest and threw him back.

“Leave it to me — RUN!”

There was a terrible snarling noise. Lupin's head was lengthening. So was his body. His shoulders were hunching. Hair was sprouting visibly on his face and hands, which were curling into clawed paws. Crookshanks's hair was on end again; he was backing away —

As the werewolf reared, snapping its long jaws, Sirius disappeared from Harry's side. He had transformed. The enormous, bearlike dog bounded forward. As the werewolf wrenched itself free of the manacle binding it, the dog seized it about the neck and pulled it backward,

鉤爪が互いを引き裂き合っていた――。
ハリーはこの光景に立ちすくみ、その戦いに心を奪われるあまり、他のことには何も気づかなかった。

ハーマイオニーの悲鳴で、ハリーはハッと我にかえた――。

ペティグリューがルーピンの落とした杖に飛びついていった。

包帯をした脚で不安定だったロンが転倒した。

バンという音と、炸裂する光――そして、ロンは倒れたまま動かなくなった。

またバンという音――クルックシャンクスが宙を飛び、地面に落ちてクシャッとなった。

「エクスペリアームス！ <武器よ去れ>」
ペティグリューに杖を向け、ハリーが叫んだ。

ルーピンの杖が空中に高々と舞い上がり、見えなくなった。

「動くな！」

ハリーは前方に向かって走りながら叫んだ。

遅かった。ペティグリューはもう変身していた。

だらりと伸びたロンの腕にかかっている手錠を、ペティグリューの禿げた尻尾がシエツとかいくぐるのを、ハリーは目撃した。草むらを慌てて走り去る音が聞こえた。

一声高く吼える声と低く唸る声とが聞こえた。ハリーが振り返ると、狼人間が逃げ出すところだった。森に向かって疾駆していく。

「シリウス、あいつが逃げた。ペティグリューが変身した！」ハリーが大声をあげた。

シリウスは血を流していた。鼻づらと背に深手を負っていた。

しかし、ハリーの言葉に、素早く立ち上がり、足音を響かせて校庭を走り去った。

away from Ron and Pettigrew. They were locked, jaw to jaw, claws ripping at each other —

Harry stood, transfixed by the sight, too intent upon the battle to notice anything else. It was Hermione's scream that alerted him —

Pettigrew had dived for Lupin's dropped wand. Ron, unsteady on his bandaged leg, fell. There was a bang, a burst of light — and Ron lay motionless on the ground. Another bang — Crookshanks flew into the air and back to the earth in a heap.

“*Expelliarmus!*” Harry yelled, pointing his own wand at Pettigrew; Lupin's wand flew high into the air and out of sight. “Stay where you are!” Harry shouted, running forward.

Too late. Pettigrew had transformed. Harry saw his bald tail whip through the manacle on Ron's outstretched arm and heard a scurrying through the grass.

There was a howl and a rumbling growl; Harry turned to see the werewolf taking flight; it was galloping into the forest —

“Sirius, he's gone, Pettigrew transformed!” Harry yelled.

Black was bleeding; there were gashes across his muzzle and back, but at Harry's words he scrambled up again, and in an instant, the sound of his paws faded to silence as he pounded away across the grounds.

その足音もたちまち夜のしじまに消えていった。

ハリーとハーマイオニーはロンに駆けよった。

「ペティグリューはいったいロンに何をしたのかしら？」

ハーマイオニーが囁くように言った。

ロンは目を半眼に見開き、口はダラリと開いていた。

生きているのは確かだ。息をしているのが聞こえる。

しかし、ロンは二人の顔がわからないようだった。

「さあ、わからない

ハリーはさすがの思いで周りを見回した。

ブラックもルーピンも行ってしまった……そばにるのは、宙吊りになって、気を失っているスネイプだけだ。

「二人を城まで連れて行って、誰かに話をしないと」

ハリーは目にかかった髪を掻き上げ、筋道立てて考えようとした。

「行こうー」

しかし、そのとき、暗闇の中から、キャンキャンと苦痛を訴えるような犬の鳴き声が聞こえてきた。

「シリウス」

ハリーは闇を見つめて呟いた。一瞬、ハリーは意を決しかねた。しかし、いまここにも、ロンには何もしてやることができない。しかもあの声からすると、ブラックは窮地に陥っているー。

ハリーは駆け出した。ハーマイオニーもあとに続いた。甲高い鳴き声は湖のそばから聞こえてくるようだ。

二人はその方向に疾走した。全力で走りながら、ハリーは寒気を感じたが、その意味には気づかなかったー。キャンキャンという鳴き声が急にやんだ。

湖のほとりに辿り着いたとき、それがなぜ

Harry and Hermione dashed over to Ron.

“What did he do to him?” Hermione whispered. Ron’s eyes were only half-closed, his mouth hung open; he was definitely alive, they could hear him breathing, but he didn’t seem to recognize them.

“I don’t know. ...”

Harry looked desperately around. Black and Lupin both gone ... they had no one but Snape for company, still hanging, unconscious, in midair.

“We’d better get them up to the castle and tell someone,” said Harry, pushing his hair out of his eyes, trying to think straight. Come —”

But then, from beyond the range of their vision, they heard a yelping, a whining: a dog in pain. ...

“Sirius,” Harry muttered, staring into the darkness.

He had a moment’s indecision, but there was nothing they could do for Ron at the moment, and by the sound of it, Black was in trouble —

Harry set off at a run, Hermione right behind him. The yelping seemed to be coming from the ground near the edge of the lake. They pelted toward it, and Harry, running flat out, felt the cold without realizing what it must mean —

The yelping stopped abruptly. As they reached the lakeshore, they saw why — Sirius had turned back into a man. He was crouched on

なのかを二人は目撃したりシリウスは人の姿に戻っていた。両手で頭を抱えている。

「やめろおおお」シリウスがうめいた。

「やめてくれええええ……頼む……」

そして、ハリーは見た。吸魂鬼だ。少なくとも百人が、真っ黒な塊になって、湖の周りに滑るように近づいてくる。

ハリーはあたりをぐるりと見回した。

いつもの氷のように冷たい感覚が体の芯を貫き、目の前が霧のようにかすんできた。

四方八方の闇の中から、つぎつぎと吸魂鬼が現れてくる。

三人を包囲している……。

「ハーマイオニー、何か幸せなことを考えるんだ！」

ハリーが杖を上げながら叫んだ。目の前の霧を振り払おうと、激しく目をしばたき、内側から聞こえはじめた微かな悲鳴を振り切ろうと、頭を振った。

僕は名付親と暮らすんだ。ダーズリー一家と別れるんだ。

ハリーは、必死で、シリウスのことを、そしてそのことだけを考えようとした。

そして、唱えはじめた。

「エクスペクト・パトローナム！<守護霊よ来たれ>エクスペクト・パトローナム！」

ブラックは大きく身震いして引っくり返り、地面に横たわり動かなくなった。

死人のように青白い顔だった。シリウスは大丈夫だ。

僕はシリウスと行く。シリウスと暮らすんだ。

「エクスペクト・パトローナム！ハーマイオニー、助けて！エクスペクト・パトローナム！」

「エクスペクトー」ハーマイオニーも囁くように唱えた。

「エクスペクトーエクスペクトー」

しかし、ハーマイオニーはうまくできな

all fours, his hands over his head.

“Nooo,” he moaned. “Noooo ... please. ...”

And then Harry saw them. Dementors, at least a hundred of them, gliding in a black mass around the lake toward them. He spun around, the familiar, icy cold penetrating his insides, fog starting to obscure his vision; more were appearing out of the darkness on every side; they were encircling them. ...

“Hermione, think of something happy!” Harry yelled, raising his wand, blinking furiously to try and clear his vision, shaking his head to rid it of the faint screaming that had started inside it —

I’m going to live with my godfather. I’m leaving the Dursleys.

He forced himself to think of Black, and only Black, and began to chant: “*Expecto patronum!*”

Black gave a shudder, rolled over, and lay motionless on the ground, pale as death.

He’ll be all right. I’m going to go and live with him.

“*Expecto patronum!*” Hermione, help me! *Expecto patronum!*”

“*Expecto —*” Hermione whispered, “*expecto — expecto —*”

But she couldn’t do it. The dementors were closing in, barely ten feet from them. They formed a solid wall around Harry and Hermione, and were getting closer. ...

った。吸魂鬼が近づいてくる。
もう三メートルと離れていない。
ハリーとハーマイオニーの周りを、吸魂鬼が壁のように囲み、二人に迫ってくる…
…。

「エクスペクト・パトローナム！」
ハリーは、耳の中で叫ぶ声を掻き消そうと、大声で叫んだ。

「エクスペクト・パトローナム！」
杖先から、銀色のものが一筋流れ出て、目の前に霞のように漂った。

同時に、ハリーは隣のハーマイオニーが気を失うのを感じた。

ハリーは一人になった——たった一人だった。

「エクスペクト——エクスペクト・パトローナム！」

ハリーは膝に冷たい下草を感じた。目に霧がかかった。浮身の力を振り絞り、ハリーは記憶を失うまいと戦った——シリウスは無実だ——無実なんだ——僕たちは大丈夫だ——僕はシリウスと暮らすんだ——。

「エクスペクト・パトローナム！」

ハリーは喘ぐように言った。

形にならない守護霊の弱々しい光で、ディメンタハリーは吸魂鬼がすぐそばに立ち止まるのを見た。

吸魂鬼はハリーが作り出した銀色の霧の中を通り抜けることができなかった。

マントの下から、ヌメヌメした死人のような手がスルスルと伸びてきて、守護霊を振り払うかのような仕草をした。

「やめろ——やめろ——」ハリーは喘いだ。

「あの人は無実だ……エクスペクト——エクスペクト・パトローナム——」

吸魂鬼たちが自分を見つめているのを感じた。ゼイゼイという息が邪悪な風のようにハリーを取り囲んでいる。一番近くの吸魂鬼がハリーをじつくりと眺め回した。

“*EXPECTO PATRONUM!*” Harry yelled, trying to blot the screaming from his ears. “*EXPECTO PATRONUM!*”

A thin wisp of silver escaped his wand and hovered like mist before him. At the same moment, Harry felt Hermione collapse next to him. He was alone ... completely alone. ...

“*Expecto — expecto patronum —*”

Harry felt his knees hit the cold grass. Fog was clouding his eyes. With a huge effort, he fought to remember — Sirius was innocent — innocent — *We’ll be okay — I’m going to live with him —*

“*Expecto patronum!*” he gasped.

By the feeble light of his formless Patronus, he saw a dementor halt, very close to him. It couldn’t walk through the cloud of silver mist Harry had conjured. A dead, slimy hand slid out from under the cloak. It made a gesture as though to sweep the Patronus aside.

“No — no —” Harry gasped. “He’s innocent ... *expecto — expecto patronum —*”

He could feel them watching him, hear their rattling breath like an evil wind around him. The nearest dementor seemed to be considering him. Then it raised both its rotting hands — and lowered its hood.

Where there should have been eyes, there was only thin, gray scabbed skin, stretched blankly over empty sockets. But there was a mouth ... a gaping, shapeless hole, sucking the air with the

そして、腐乱した両手を上げーフードを脱いだ。

目があるはずのところには、虚ろな限寓と、のっぺりとそれを覆っている灰色の薄いかさぶた状の皮膚があるだけだった。

しかし、口はあった……がっぽり空いた形のない穴が、死に際の息のように、ゼイゼイと空気を吸い込んでいる。

恐怖がハリーの全身を麻痺させ、動くことも声を出すこともできない。

守護霊は揺らぎ、果てた。

真っ白な霧が日を覆った。

戦わなければーエクスペクト・パトローナムー何も見えない……すると、遠くの方から、聞き覚えのあるあの叫び声が聞こえてきた……エクスペクト・パトローナム……霧の中で、ハリーは手探りでシリウスを探し、その腕に触れた……あいつらにシリウスを連れていかせてなるものか……。しかし、べっとりした冷たい二本の手が、突然ハリーの首にがっちり巻きついた。

無理やりハリーの顔を仰向けにした……ハリーはその息を感じた……僕を最初に始末するつもりなんだ……腐ったような息がかかる……耳元で母さんが叫んでいる……生きている僕が最期に聞く声が母さんの声なんだー。

すると、そのとき、ハリーをすっぽり包み込んでいる霧を貫いて、銀色の光が見えるような気がした。だんだん強く、明るく……。

ハリーは自分の体がうつ伏せに草の上に落ちるのを感じた。

うつ伏せのまま身動きする力もなく、吐き気がし、震えながらハリーは目を開けた。

目も眩むような光が、あたりの草むらを照らしていた……耳元の叫び声はやみ、冷気は徐々に退いていった……。何かが、吸魂鬼を追い払っているー……何かがハリー、シリウス、ハーマイオニーの周りをグルグル回っている……ゼイゼイという吸魂鬼の息が次第に消えていった。吸魂鬼が去って

sound of a death rattle.

A paralyzing terror filled Harry so that he couldn't move or speak. His Patronus flickered and died.

White fog was blinding him. He had to fight ... *expecto patronum* ... he couldn't see ... and in the distance, he heard the familiar screaming ... *expecto patronum* ... he groped in the mist for Sirius, and found his arm ... they weren't going to take him. ...

But a pair of strong, clammy hands suddenly attached themselves around Harry's neck. They were forcing his face upward. ... He could feel its breath. ... It was going to get rid of him first. ... He could feel its putrid breath. ... His mother was screaming in his ears. ... She was going to be the last thing he ever heard —

And then, through the fog that was drowning him, he thought he saw a silvery light growing brighter and brighter. ... He felt himself fall forward onto the grass. ... Facedown, too weak to move, sick and shaking, Harry opened his eyes. The dementor must have released him. The blinding light was illuminating the grass around him. ... The screaming had stopped, the cold was ebbing away. ...

Something was driving the dementors back. ... It was circling around him and Black and Hermione. ... They were leaving. ... The air was warm again. ...

With every ounce of strength he could muster,

いく……暖かさが戻ってきた……。

あらんかぎりの力を振り絞り、ハリーは顔をほんの少し持ち上げた。そして、光の中に、湖を疾駆していく動物を見た。

汗でかすむ目を凝らし、ハリーはその姿が何かを見極めようとした……それは一角獣のように輝いていた。薄れゆく意識を奮い起こし、ハリーはそれがむこう岸に着き、走る足並を緩め、止まるのを見つめていた。

眩い光の中で、ハリーは一瞬、誰かがそれを迎えているのを見た……それを撫でようと手を上げている――…なんだか不思議に見覚えのある人だ……でも、まさか――。

ハリーにはわからなかった。もう考えることもできなかった。

最後の力が抜けていくのを感じ、頭がガックリと地面に落ち、ハリーは気を失った。

Harry raised his head a few inches and saw an animal amid the light, galloping away across the lake. ... Eyes blurred with sweat, Harry tried to make out what it was. ... It was as bright as a unicorn. ... Fighting to stay conscious, Harry watched it canter to a halt as it reached the opposite shore. For a moment, Harry saw, by its brightness, somebody welcoming it back ... raising his hand to pat it ... someone who looked strangely familiar ... but it couldn't be ...

Harry didn't understand. He couldn't think anymore. He felt the last of his strength leave him, and his head hit the ground as he fainted.